基礎経済科学研究所 自由大学院
大阪第三学科(金融流通協同組合論ゼミ)からのたより

［第８１２回ゼミ報告］２０２０年９月４日号

毛利の「三本の矢」伝説は史実かどうか別にして、現代の「三本の矢」はとうとう潰えた、それも唐突に。非正規の「言葉」を一掃すると言ったが、４割にまで・・
７月２２日のゼミは、マルクス『資本論』第３巻３３章 「信用制度下の通流手段」の後半(S.546 から)を大村さんの報告で行いました。前回と同様に西村閑也に基づいて後半を追っていく。ここでは銀行の信用創造が問題であり、銀行券の発行高についての証言・見解から銀行券発行はいつも資本の前貸しとは意味しない。イングランド銀行と大貨幣資本家の支配について、信用創造＝架空資本の形成で利益をもたらし、金属準備で保証されない銀行券発行は追加利潤をもたらし、このことでどのように銀行が信用と資本とを創出するか知ることができる。「集中」の問題として大貨幣貸付業者・大高利貸しを中心とした信用制度を取り上げ、これを寄生階級と呼び、産業資本家を周期的に破滅させ、生産のことは何も知らず、生産に干渉する。国家と結びついたその危険性を、マルクスは早い時点ですでに指摘していた。
討論では、３巻をエンゲルスが編集したが、引用している元の資料が英語で、エンゲルスが独語に翻訳して本にしたが、訳が少し違っているという、大谷禎之介の指摘があり、もう一つの問題はマルクスのノートから抜粋する場合、あちらこちらから集めて掲載したことも問題視している。恐慌の発生は商業ではなく産業資本を原因として分析するが、信用恐慌はどうか。当時とは違いMMＴ理論や電子マネーの存在する現代ではどのように恐慌を扱うのか。「象徴化」(S548)とあるが「証券化」ではないか。ここでの集中へのマルクスの記述は皮肉を込めている、大高利貸し・寄生階級、生産のことは何も知らないと。草稿はまず第３巻の部分が最初に書かれていて、それは１巻が出版されるＴ１５・６年前であり、その点を考慮して第３巻を読む必要がある。
出席は、高島さん、斎藤さん、大村さん、高田の４名でした。

＊９月９日ゼミは、個人報告「1930 年代の世界」をテーマに行います。
＊６月１０日ゼミで萩原本を終わりました。１０月からの新しいテキスト候補の推薦をお願いします。

＊＊＊＊＊＊ ゼミ日程 ＊＊＊＊＊＊＊

９月９日(水)午後６時半～９時　淀屋橋道修町・アイクルの部屋
個人報告：テーマ「１９３０年代の世界」　報告小野さん
９月２３日(水)午後６時半～９時　淀屋橋道修町・アイクルの部屋
マルクス『資本論』第３巻３４章　通貨主義・銀行立法　報告大村さん
１０月１４日(水)午後６時半～９時　淀屋橋道修町・アイクルの部屋
テキスト未定　報告者未定
１０月２８日(水)午後６時半～９時　淀屋橋道修町・アイクルの部屋
マルクス『資本論』第３巻３５章　貴金属と為替相場　報告者未定
その後 11/11, 11/25, 12/9, 12/23, 1/13, 1/27, 2/10, 2/24 (アイクルの部屋)

◇第三学科事務局/高田好章： ytakada@kcn.ne.jp　090-8658-3755
HomePage: http://ysweb.g.dgdg.jp/ytakada/kisoken/　Pass: kiso